

〔研究ノート〕

## イソップ伝の「難題問答」

岩 男 久仁子\*

今日、テレビ番組などで、数多くのクイズが取り扱われている。様々なことにどれくらい精通しているのかを問うものなど、毎日のように放送され、問題・謎を解答することがあふれている。問題が難しければ難しいほど、解答する者の知恵、頭脳の優秀さを示し、解答する手法に、読者（見物人）は感嘆する。そんなところに「難しい問題を解く」ことの魅力があるのだろう。この魅力は昔話や伝承物語の中では「難題問答」<sup>1)</sup>というタイプにまとめられている。「難題問答」は物語に頻繁に使われる手法である。難しい謎の答えはどんなものなのか。これが読者が気になるところなのである。そんな手法が多く取り扱われている「イソップ伝」（イソップの生涯の物語）の中から、取り上げてみる。

イソップ寓話の作者とされているイソップ<sup>2)</sup>。「イソップ伝」には、彼が持っている知恵を使ったエピソードで展開し、彼が奴隷身分であったこと、その主人との関係、最終的には奴隷の身分から自らの知恵で解放され「自由人」になったこと、そして無念の最期が語られている。まず、難題を解決していくエピソードとして、とりあげてみるのは、「海の水を飲む話」という話である。「イソップ伝」の中で語られる寓話やトピックに便宜上

---

\* 本学兼任講師

キーワード：イソップ、難題問答、蟻通し、アヒカル、棄老説話

小題をつけたものが44個ある<sup>3)</sup>。最も数が多いのが、奴隷イソップが主人クサントスに使える場面である<sup>4)</sup>。その中でこの「海の水を飲む話」は、イソップと主人クサントスとの関係がよく分かり、なおかつ「難題問答」のパターンを有している。その話の内容は、

クサントスが宴会で泥酔し、他の者に海の水を飲みつくすことができる  
と大言壮語し、次の日に決着を付けることを約束させられた。飲み干せない  
場合は、クサントスが持っている財産すべて、出題者に渡すというもの  
である。しかし、翌日になるとクサントスは全く覚えていない。しかし、  
酔った上とはいえ、約束は約束。イソップから知らされた内容に、クサン  
トスは愕然とする。そこでイソップに助けを求めるのである。

さて、この難題は、どのように解決したのか。イソップが主人クサント  
スに授けた知恵はこのようなものである。

海の水を飲むのであるから、海に流れてくる水は関係ない。つまり海に  
流れてきている川の水をすべて堰きとめよ。と、難題出題者にさらに難題  
で返したのである。

イソップは、持ち前の知恵でもって、主人の危機をこの難題を解決する。  
その報酬として、クサントスに主従関係の解消、つまり奴隷の身分からの  
解放を申し出るが聞き入れられない。このことはイソップの心の中に深く  
残ることとなる<sup>5)</sup>。

さて、ここでの難題の解決パターンである。難題の出題者にその解答と  
して関連の難題を重ねて出すという。これは、ある意味「解答がない問題」  
なのである。他にも、「空中に楼閣を建設せよ。」「馬についての話」「聞いて

## イソップ伝の「難題問答」

たことが無い話」などがある。これらは、イソップがバビロニアで宰相在任中にエジプトから出された問題である。「空中に楼閣を建設せよ。」という話は、エジプトがバビロニアに出題した最初の問題で、それ以外はイソップがバビロニアに出向いてから出されたものである。イソップ伝の中にはこのような「難題に難題を重ねる」タイプ以外にも、解答がある話もある。例えば、「世界、年月の問」である。

イソップがエジプトへ出題された問題を解きに行き、その国の予言者たちから別の問題がだされる。

彼らは言う「ある神殿がありまして、一つの柱があり、その柱の上に12の都市があり、その各々が30の梁で包まれていて、その各々の周囲に女が二人走っています。」

イソップ、「こんな問題は私たちの所では子供が解きます。」と前置きし、ある神殿とは世界のこと。すべてを包含しているから。柱は1年のこと世界を進行させているから。12の都市は1ヶ月のこと。それぞれの30の梁は1ヶ月の30分の1日のこと。周りをまわっている女は昼と夜のことである。

(昼 ἡ ἡμέρα 夜 ἡ νύξ どちらも女性名詞であるので、昼、夜両方も女として擬人化している。)

というもの。

難題問答話のパターンとして、『昔話タイプ・インデックス』<sup>6)</sup>を参考にすると、「807 鳴る手はどちら」「808 馬の歩数」「809 入るか出るか」「810 父は難産」「811 山を運ぶ」「812 のみの牙」「813 虎をしばれ」「814 蓋を取るな」「815 狐の鳴き色」「816 座頭と博労」「817 いちこくろくと

の鳥」「818 灰縄」「819 打たぬ太鼓」「820 なんどり」「821 木の元末」「822 馬二頭に鞍一つ」「823 馬の親子」「824 蟻通し」「825 この橋を渡るな」「826 みなぬか」「827 柄皮孫佐衛門」（番号は『昔話タイプ・インデックス』による）など20種ある。

この中では、「813 虎をしばれ」、「825 この橋を渡るな」などは有名な話である。

「825 この橋を渡るな」では、橋の入り口に「このはしを渡るな」という立て札がありそれをみて、橋の真ん中を渡っていくというもの。昔話の「一休さん」のとんち問答である。もう一つも同じ「一休さん」の話にある「813 虎をしばれ」では、「屏風の絵の虎を縛れ」と難題を出し、「縛るので、その虎を屏風から追い出してくれ」答えるのである。「難題に難題をかさねる」パターンである。難題が物語のキーになっているものは、イソップ伝だけではなく日本にも数多く存在する。「竹取物語」は、主人公かぐや姫が求婚を退けるために難題を出した。

ここで、難題問答のパターンの1つである。「824 蟻通し」に注目してみる。これは、イソップ伝のエピソードと、というより、イソップ伝の中に保存された「賢者アヒカル物語」のエピソードとある部分が共通するところがある。これを説明する前に「824 蟻通し」について述べる。

かきくもり あやめも知らぬ 大空に ありとほしをば 思ふべしやは<sup>7)</sup>  
七曲に曲れる玉の緒を貫て蟻通しとは知すや有覧<sup>8)</sup>

どちらも紀貫之が読んだ歌である。この2首に共通する言葉は「蟻通し(ありとほし)」。これは、貫之が紀州から京都へ帰る途中、この神社近くを通ると急に乗っていた馬が苦しみだし、あまり信仰されていない神社の神による仕業と話を聞き、歌を詠んで奉ったという話である。そのあまり

## イソップ伝の「難題問答」

信仰されていなかった神社の神が「蟻通明神」で、現在の泉佐野市にある「蟻通神社」（泉佐野市長滝814番地）<sup>9)</sup>に祀られている。その神社にまつわる「蟻通明神説話」とは、紀貫之の『貫之集』と清少納言の『枕草子』などに、いくつかの文献<sup>10)</sup>に言及されている。『枕草子』の第228段<sup>11)</sup>には、貫之のエピソードとともに、「蟻通明神」の由来話が出ている。

昔、帝が40歳以上の老人を嫌い、殺すので、都には老人が1人もいなくなった。ここに帝の信任厚い中将がいたが、彼には70歳近い両親がいた。孝行な中将だったので、自分の家の地下に両親を匿い、世間には「両親はどこか姿を隠した」と思わせていた。その頃、唐の帝が日本を占領するために、数々の難題を持ちかけ、答えられないならば、唐の属国になれば、圧力をかけてきた。その難題を中将は匿っている両親の知恵により、解決した。その最後の難題が「七つに曲った穴のある玉に糸を通すにはどうするか。」というものであった。中将は、両親の言うとおりに、蟻の腰に糸を括り付け、穴の中に入れ、出口に蜜を塗ると、蟻が穴を通して出てきて、玉に糸が通すことができた。これで、唐の帝の野心は挫かれ、その恩賞を中将は受け取る代わりに、年老いた両親の命を助け、一緒に住むことを乞い、許可された。帝も、それ以後、老人を嫌うことを改めた。中将の親が死んで、神となって顕現したのが、「蟻通明神」という。

中将の親が神になる前までは、よく知られた話のタイプである。これは、「棄老説話、難題解決型」<sup>12)</sup>というタイプに属する。難題問答が、棄老説話（老人＝年をとった親を捨てる話）と合わさって一つの話となっている。まず、(1)棄老を定めた国があり、(2)隣国から難題を持ち込まれる。(3)匿われた老人の知恵を借りて、解決。(4)棄老の国から養老の国になる。という話である。(2)の隣国から出された問題というのは、「曲りくねった穴のある玉に、糸を通す方法」だけでなく、他にもある。『枕草子』には、「均等に削った木の末と根本の区別の方法（821 木の元末）」、「同じ長さ（大き

さ)の蛇の雌雄の見分け方」がある<sup>13)</sup>。ここで前述したイソップ伝の中に保存されている「アヒカル物語」とは次のようなものである。

「アヒカル物語」の最古のテキストは紀元前5世紀後半のアラム語パピルスであるが、物語が成立したのははるかに古い時代である。その起源はアッシリア、あるいはペルシアであり、ギリシア語の他にも様々な言語に訳され、流布した。アヒカルの賢者振りをイソップに重ねあわせたのである。現存の「アヒカル物語」は欠損が激しく、物語が中断しているが、「イソップ伝」はそれを補っている。「イソップ伝」に入ったことで「アヒカル物語」が形を変えて残ったと思われる。

「イソップ伝」での内容は、イソップは、養子の奸計に陥れられ、仕えていた王に死刑を宣告された。しかし、友人により匿われ、命を救われる。その時、王に他国からの難題がもたらされ、イソップの死刑を後悔したが、実は生きているということが判明し、イソップを助け、彼の知恵により難題を解決する。

「イソップ伝」および「アヒカル物語」と「蟻通明神説話」との相違は、「棄老伝説」の部分であることは、明らかである。イソップやアヒカルの場合は刑罰としての「父(親)を処刑されることがあり、「824 蟻通し」では領主が定めた法により、親を捨てる(殺す)のである。

ここで、注目したいのは、「難題問答」の部分である。「イソップ伝」と「アヒカル物語」で、出題された難題は前述した「空中に楼閣を建設せよ」というものである。この話は、大きなワシ4羽を調教し、その足に子供が乗れるくらいの籠をくくりつけ、楼閣を建てる空間に飛ばす。その上空に建築材料を持って来て、籠に乗っている子供に渡すよう出題者に言う。無理なので、この問題は逆に出題者の敗北で終わる。というもので、「蟻通明神説話」との難題とは違う。しかし、難題を解決するのは、虐げられた老人であるイソップであり、アヒカルなのである。また、解決後、さらに

## イソップ伝の「難題問答」

重臣となって、イソップの名誉は回復される。「蟻通明神説話」では、棄老の風習がなくなり、救われた中将の親が、神となるという結末になっている。

このように、日本と遠くはなれた国に伝わる物語・伝説によく似たものがあるわけである。しかし、細部まで全く同じというわけではない。地域も違い、また、時代も違う。全く別の地域の人類が作り出した物語が、偶然に同じであったということも考えられる。また、「アヒカル物語」が「イソップ伝」のように、一つエピソードとして組み込まれることで、保存されるという事態もあった。現在までに伝承されてきている説話の生まれたところは、推測することはできるが、確定することは容易ではないだろう。

今一度、現在まで伝承されてきたイソップ伝、寓話集に限って見てみると、「イソップ寓話」は、おもに動物を使った例え話で、教訓を表したり、社会を風刺したりする面が印象的である。「イソップ伝」になると教訓よりも、イソップ自身の人物像が前面に出てきている。イソップが受けてたった難題問答で、効果的に賢者ぶりを発揮し、読者に「イソップはとても賢い」という印象を与えることに成功している。それによって、イソップが作ったとされる寓話の内容が、読者により深く納得させる効果を持たせることができる構成になっているのだ。

### 注

- 1) 稲田浩二『日本昔話通観28 昔話タイプ・インデックス』
- 2) これを確定づけるのはいくつかの疑問点があるが、ギリシア語テキスト（G本は最も古いイソップ伝と目され、紀元後1世紀後半から2世紀初めごろにCodex Monacensis 564と呼ばれている231話の寓話を含む アウグスターナI (Augustana I) 版（ギリシア語）が成立する。）のはじめには以下のように書かれてある。

BIBΛOΣ ΞΑΝΘΟ(Υ) ΦΙΛΟΣΟΦΟΥ ΚΑΙ ΑΙΣΩΠΟΥ ΔΟΥΛΟΥ ΑΥΤΟΥ ΠΕΡΙ  
ΤΗΣ ΑΝΑΣΤΡΟΨΗΣ ΑΙΣΩΠΟΥ

‘Ο πάντα βιωφελέστατος Αἴσωπος, ὁ λογοποιός, τῇ μὲν τύχῃ ἦν δοῦλος, τῷ δὲ  
γένοι Φρυγῆ τῆς Φρουγίας. . .

アイソポスの行状をめぐる哲学者クサントスと彼の奴隷アイソポスの書  
万事につけ有益なことこのうえなきアイソポス（イソップ）、物語作者。  
この者は運命によって奴隷であったが生まれにおいては、フリュギア出身の  
フリュギア人であった。（以下略）

- 3) 岩男久仁子『G本と天草本ならびに古活字本との比較を中心とするイソップ伝研究』Ⅰ 「イソップ伝挿話対照表」
- 4) 同上 Ⅱ 「イソップ伝の各版の分析」 2) 第2部、クサントスに使える場面
- 5) 同上 Ⅲ G本の独自性 4) 「自由」の問題
- 6) 稲田浩二『日本昔話通観28 昔話タイプ・インデックス』
- 7) 『俊頼髓脳』冷泉家時雨亭文庫
- 8) 『土佐日記 貫之集』新潮日本古典集成
- 9) 1942年（昭和17）、本来の「蟻通神社」に「旧陸軍明野飛行学校佐野分校」が設立されたため、現在の位置に移転された。
- 10) 『神道集』7・38「蟻通明神事」、『蟻通明神のえんぎ』（『室町時代物語大成』2）、『横座房物語』（『室町時代物語大成』13）などがある。
- 11) 版本によって、段落番号に違いがある。本稿は『枕草子』講談社学術文庫2003年によった。
- 12) 「棄老説話、もっこ型」というタイプもある。自分の子に「もっこ」に乗せられ、山に捨てられる老人が、「お前も、自分の子に捨てられる時に必要だから、もっこを持って帰れ」と言い、子は親を捨てることを考え直すというもの。
- 13) 他にも「たたかずになる太鼓」、「灰で縄を作る方法」「馬の親子の区別の方法」といった「難題」の種類がある。

参 考 文 献

- 『キリシタン版エソポ物語』大塚光信校注 角川文庫 1971  
『イソップ伝の研究』島田清太郎 中央公論事業出版 1973



イソップ伝の「難題問答」

- 『美濃の昔話』日本の昔話16日本放送出版協会 1977  
『浪速の昔話』日本の昔話17日本放送出版協会 1977  
『日本昔話辞典』弘文堂 1977  
『天草本伊曾保物語などのことⅢ』島正三編 文化書房博文社 1983  
『土佐日記 貫之集』新潮日本古典集成 1988  
『日本昔話通観28 昔話タイプ・インデックス』稲田浩二編 同胞舎 1988  
『泉佐野の歴史と文化財 第4集 泉佐野の史跡——街道に見る史跡編——』  
泉佐野教育委員会 1996  
『夢の神話学』井本英一 法政大学出版局 1997  
『日本昔話通観 研究編2 日本昔話と古典』稲田浩二編 同胞舎 1998  
『枕草子』講談社学術文庫 2003  
『G本と天草本ならびに古活字本との比較を中心とするイソップ伝研究』岩男  
久仁子 桃山学院大学大学院文学研究科博士論文 2003  
『俊頼髓脳』冷泉家時雨亭文庫編 朝日新聞社, 2008